

東山会会報

平成 15 年 10 月 31 日発行
名古屋市千種区不老町 〒464-8603
名古屋大学 工学部 機械工学教室内
名古屋大学東山会
連絡先：TEL 052-789-4486(酒井教授室内)
E-mail: mechalum@everest.mech.nagoya-u.ac.jp
<http://www.higashiyamakai.com>

第 4 回 東山へ帰る日



工学部 2 号館前にて記念撮影



工学部同窓会名簿購入のお願い

既にご承知のとおり、工学部全学科の卒業生および工学研究科全専攻の修了生の最新データ約35,000件が掲載された工学部同窓会名簿が平成 15年1月に改訂発行されました。

東山会会員の皆様に以下の通り販売しております。まだ残数に余裕がありますので、是非ご購入いただきますようお願いいたします。名簿を希望される方は、上記の事務局までご連絡下さい。

CD版 3,500 円、冊子版 4,500 円

E-mail 登録のお願い

東山会では今後、会員への連絡手段として E-mail を活用していきたいと考えています。現在、東山会員総数約 4500 名に対し、E-mail を登録されている方は 1000 名程度となっております。E-mail の登録、住所変更等は東山会ホームページから行えるようになっておりますので、まだ E-mail のご登録がお済でない方は、ご登録いただきますようお願いいたします。

東山会 HP : <http://www.higashiyamakai.com>

平成 16 年 東山会 総会・新年同窓会

平成 16 年東山会総会・新年同窓会を、下記の要領で開催します。お誘い合わせの上、多数ご参加ください。

- 日時：平成 16 年 1 月 10 日（土）12:30 - 15:30（この時間内は出入り自由、最初の 20 分は総会）
- 会場：名鉄グランドホテル
- 会費：8,000 円

（当日受付もいたしますが、整理の都合上、なるべく 12 月 15 日までにお申込みください。関連ページ p.9）

21 世紀 COE に採択される

文部科学省が推進する、21 世紀 COE プログラム（機械、土木、建築、その他工学）にマイクロシステム工学専攻が中心となって申請した「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス（拠点リーダー：三矢保永教授）」が採択されました。

本会報では、拠点リーダーの三矢教授にインタビュー形式でプログラムの内容や COE 採択に至るまでの苦労話を語っていただきました。（関連ページ：p. 3 - 5）

会長挨拶 東山会の改革 財政基盤確立のためにー

会長
鈴木 隆 充
(第17回, 昭和33年卒)



東山会の運営の改革を鋭意進めています。
今回から会報をインターネットでお届けすることにしました。
インターネットの会報は初めての試みなので不十分なところが多いと思います。
ご意見をお寄せ下さいますようお願いいたします。
印刷物をご希望の方には別途お届けします。
いろいろ進めている改革の状況がこの会報に報告されていますのでご覧下さい。

今年6月には第4回の「東山に帰る日」を行いました。
参加された会員の皆さんは昔を懐かしみ、大変ご満足いただいた様子でした。
会員のお役に立つ催しをほかにいくつか検討しています。

運営の基盤としてこれまでは卒業のとき払っていただいた終身会費でまかなってきました。しかし、増
えて行く一方の会員へのサービスがそれだけでは果たせなくなって来ています。
財政基盤を会員の皆さんによって支えていただきたいと思います。

特別寄稿 「電気の半世紀」

中電興業(株) 社長
青木 輝 行
(第18回, 昭和34年卒)



東山会の新年同窓会は業界の賀詞交歓会と日時がいつも重なり出席できずにいますが、会社の中に、とお
ざんかい(東山会)とよぶ名古屋大学同窓会があって、その例会には毎回出席し、若い人達との懇談を楽し
みにしてきました。電力会社に就職してからこの夏退任するまでの44年の間、主に発電所の立地、建設に従
事しました。高度成長下での石油火力の建設、オイルショック後のLNG・原子力を中心とする電源の多様化、
地球環境問題の深刻化、電力小売自由化の拡大、等、電気事業をとりまく状況は大きく変わってきた半世紀
でありました。

ウチの裏庭にだけはやめて(NIMBY)に象徴される主張のなかで、発電所は何とか立地されてきましたが、
悩まれた末に認めて下さった地域の方々にはいつまでも感謝の思いでいます。また、この間、人類への警告
をした「成長の限界」(ローマクラブ、1970年)、資源の消費を再生可能な範囲にとどめようという「持続可
能な開発」(地球サミット1992年)などの討論には電気事業界からも積極的に参画してきました。南北格差
や先進国間の温度差はあっても、同じ地球号という連帯感が着実に育ってきていると思います。

本年も、米国の大停電が問題となりました。わが国の電気事業者にとって供給信頼度、環境対策等は高い水
準にあると思いますが、このことにはわが国の地域別の発送配電一貫方式が効を奏しています。しかし、電
力小売自由化が拡大されていくなかで、経営効率化を進め、より安い料金を実現して、私企業としての競争
力を確保すること、エネルギーセキュリティ・安定供給・環境保全など公益事業としての社会的責務の達成
をいかに両立させるかが喫緊の課題です。

半世紀をふり返って、上記の面においても大学や研究機関の働きは本当に大きかったと思います。いま、多
くの人達が、わが国の科学技術立国をより進め、産学官の連携をより強化することを望んでいます。研究レ
ベルの高い名古屋大学の貢献を非常に期待しています。

COE インタビュー プロジェクトリーダー三矢教授に聞く

この度、文部科学省の21世紀COE (Center of Excellence) プログラムに、機械系の専攻から申請した「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」が採択されました。今回は、プロジェクトリーダーであるマイクロシステム工学専攻の三矢保永教授に、プログラムの内容についてお話を伺います。



Q. はじめに21世紀 COE プログラムについて簡単にご説明をお願いします。

日本の大学を世界的なレベルの研究拠点に育成するために、文部科学省が平成14年度から始めた事業です。機械系は今年度の対象分野に含まれていました。機械・土木・建築・その他工学分野には、全国の大学・研究機関から106件の応募があり、機械系では合計11件が採択されました。採択されたプログラムには研究教育資金が重点的に配分されることとなります。名古屋大学からは、マイクロシステム工学専攻が中心となり、機械系から1件を申請していました。今回これが採択されたものです。

Q. プログラム「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」について概要をお教え下さい。

21世紀には、産業構造、社会構造に大きな変革をもたらす基盤技術として、ナノテクノロジーの発展が期待されています。これに応えるために、ナノ機械科学(機械分野におけるナノ理工学)を探求し、マイクロナノメカトロニクス技術として融合し、高度情報社会のインフラストラクチャとなるシステム化技術を開発する研究拠点を形成します。システム化技術としては、マイクロナノメカトロニクスが主導して、その研究成果を最も有効に活用できる分野として、情報機械・情報知能化ロボット・生命情報医療の三つシステムを対象とします(図1)。

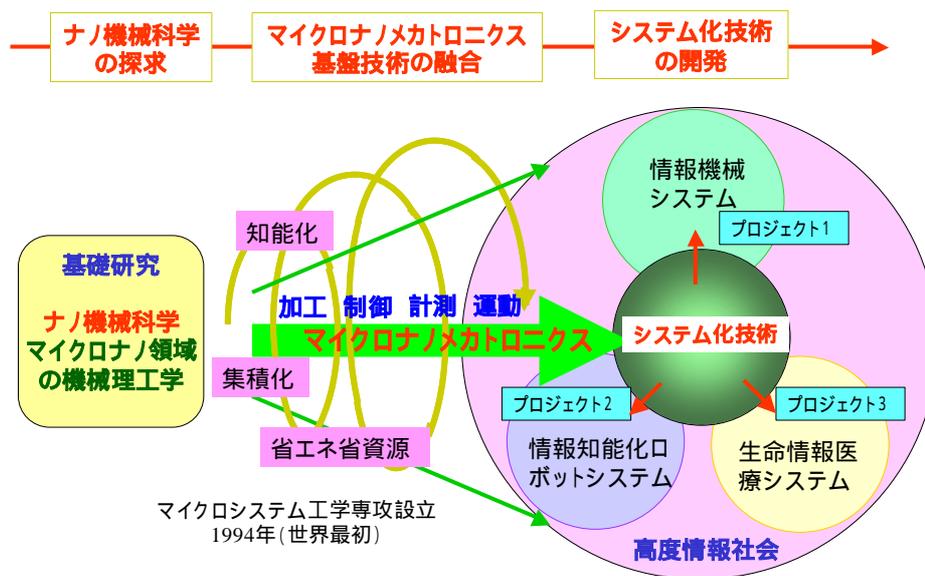


図1 拠点形成の目的

Q. 具体的には、どのような形でプロジェクトを進めていくのでしょうか。

本プロジェクトの目的は、世界レベルの研究拠点の形成ということですので、研究の質的向上に加えて、若手研究者の育成という使命を負うことになります。

まず研究の進め方について説明します。ナノテクノロジーは、材料・電子の分野の技術として脚光を浴びていますが、機械技術の分野においても、極めて重要な技術となりつつあります。機械の特徴は相対運動を伴うということにあり、相対運動の境界面としては、固体や液体・気体があります。これらの特性には、マイクロナノの微小領域の相対運動において、量子化の影響が現れます。例えば、表面力、摩擦力、摩擦、破壊、流れなどが量子化されます(図2)。このような量子効果を対象とするナノ機械科学の分野について研究を推進します。メカトロニクスは、加工・制御・計測・運動の四つの分野を融合した技術です。当拠点では、これらの分野において、これまでに顕著な成果を上げてきました。そこで、ナノ機械科学の研究成果を、加工・制御・計測・運動に関わる要素技術と融合させ、マイクロナノメカトロニクスの基盤技術として体系化します。さらに情報社会を担うシステム化技術として、三つのシステムの開発を進めます(図3)。情報機械システムは、機械的な方法によって時間情報と空間情報の変換を行うものです。ビットサイズは原子分子サイズに、画素サイズは光の波長に迫っています。ここでは高記録密度化、高精細化により、高速・大容量の情報ストレージを実現し、情報ネットワークに提供します。このネットワークと人間との切り口に情報医療治療システムを、また機械との切り口に情報知能化ロボットシステムを位置付けます。ヒトに対しては、個人別の膨大な遺伝情報や生涯病歴に基づいた情報医療治療システムの構築を目指します。ここでは、化学ICチップと人工細胞デバイスを研究します。機械に対しては、大規模センサ群やセンサ情報統融合に基づいた情報知能化ロボットシステムの開発を目指します。ここでは、ロボットの知能化および自律化を研究します。また、情報ネットワークを介して、ヒトとの間で情報空間と物理空間を共有することができれば、人間共存協調型ロボットを実現することができます。

つぎに人材養成について説明します。教育の充実と若手研究者の育成は本拠点の重点施策です。このために、以下のプログラムを準備します。

- 1) ドクターコース学生のRA雇用，ポスドク雇用を拡充し，若手研究者から構成される研究グループの形成を奨励して，競争的研究環境を醸成します。
- 2) 大学院学生を国際会議で積極的に発表させて国際性を涵養するとともに，短期派遣制度を定着させます。
- 3) 若手研究者の独創的なアイデアには，学内外の支援を優先的に活用して事業化を促進します。
- 4) 新展開が有望なテーマを設定して，学生にアイデアを応募させ，優秀なアイデアには研究費を補助して研究を実施させるとともに，成果を評価します。
- 5) 社会人を積極的に受け入れ，キャリアアップした高度職業人を育成します。

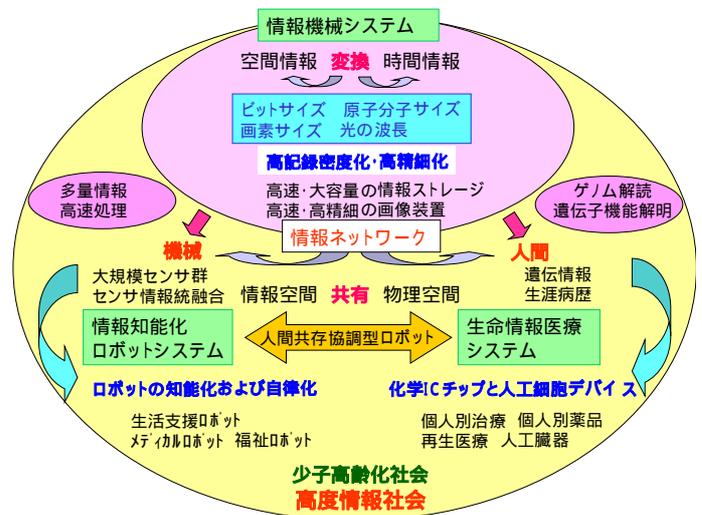
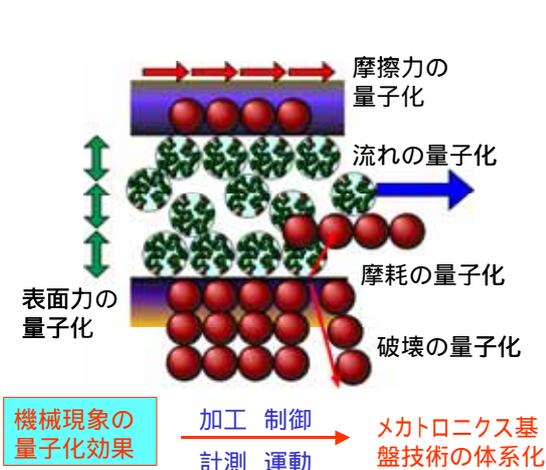


図2 ナノ機械科学分野における量子化効果 図3 高度情報社会を支えるマイクロナノメカトロニクス

Q. 私たちは、プロジェクトの進行状況やその成果をどのような形で見る事ができるのでしょうか。

研究拠点としての役割の一つとして、先導的な情報発信基地であることが求められます。このため、種々のメディアを利用して、アクティビティを示し、成果を積極的に公開するとともに、外部の評価を受けることが必要になります。現在、2年ごとに国際ワークショップ開催して、ここで成果を集中的に発表して、評価を受けることを考えています。また、関連する分野の会議に、共催協賛して参画することにより、適宜発表の機会を設ける予定です。さらに、本プロジェクトの専用ホームページを開設して、最新情報を盛り込むとともに、担当する教官のホームページにも、成果の詳細を掲載するなど、迅速な成果公開に務めたいと考えています。

Q. では、採択に至るまでの苦労話などありましたら、お聞かせ下さい。

機械工学がカバーする領域は多分野にわたり、また専門領域は細分化され、多く優れた先生方がこれまでに高い研究を挙げてこられました。このなかから、名古屋大学として最強の研究者集団をいかに構成するか、という課題が最初の関門でした。当時機械系の主任であった田中(啓)先生・新美先生の卓見により、機械系全体の支持が得られ、また目的に合致する集団を構成することができました。次の関門がプロジェクトとして勝ち残るための研究戦略の構築でした。ここでは、外部評価が高く、産業界との連携研究の豊富なシステム化技術を中心に据えて、研究レベルが高く時流にも合致するナノ機械科学分野とリンクさせるという条件を模索して行き着いたところが、「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」でした。申請事務処理に対応するために事務局を設置して、申請資料の作成、ヒアリング発表資料の作成、ヒアリングの準備発表など、膨大な時間と作業を伴う処理をしてきました。学内選考、申請書類選考、ヒアリング選考などの熾烈な競争を経て、採択されたのはなによりでした。個人的には、国際会議の主催、ミレニアムプロジェクトの中間審査などと時期が重複して、我が人生のなかでこれまでに経験したことがないほどの最大の繁忙期間でした。

Q. 最後に卒業生の方に一言、お願いします。

皆さんの母校である名古屋大学機械系から採択されたことで、皆さんに対する面目を保つことができました。大学にも競争原理が導入され、研究の進め方・教育の方法が大きく変わろうとしています。とくに来年度の独立行政法人化の実施は、戦後の最大の変革と言われています。COE拠点形成プログラムは、方法論はともかくとして、大学に意識改革をもたらす絶好の機会を与えたといわれています。これからは、ますます大学としての存在意義が問われることとなります。皆さんには、卒業した単なる母校という認識を一步進めて、母校の存在意義を一層高めるために、シンパとしての所属意識をもって、積極的にご支援ご協力をいただきたく思います。

COE ホームページ <http://coe.mech.nagoya-u.ac.jp/gaiyotxt.html>

事業推進担当者

三 矢 保 永*	MITSUYA Yasunaga	工学研究科マイクロシステム工学専攻教授
福 田 敏 男	FUKUDA Toshio	工学研究科マイクロシステム工学専攻教授
生 田 幸 士	IKUTA Koji	工学研究科マイクロシステム工学専攻教授
佐 藤 一 雄	SATO Kazuo	工学研究科マイクロシステム工学専攻教授
田 中 啓 介	TANAKA Keisuke	工学研究科機械工学専攻教授
新 美 智 秀	NIIMI Tomohide	工学研究科機械工学専攻教授
新 井 史 人	ARAI Fumihito	工学研究科マイクロシステム工学専攻助教授
大 野 信 忠	OHNO Nobutada	工学研究科マイクロシステム工学専攻教授
社 本 英 二	SHAMOTO Eiji	工学研究科機械工学専攻教授
松 室 昭 仁	MATSUMURO Akihito	工学研究科マイクロシステム工学専攻助教授
秋 庭 義 明	AKINIWA Yoshiaki	工学研究科機械工学専攻助教授
梅 村 章	UMEMURA Akira	工学研究科航空宇宙工学専攻教授
菊 山 功 嗣	KIKUYAMA Koji	工学研究科機械工学専攻教授
式 田 光 宏	SHIKIDA Mitsuhiro	難処理人工物研究センター講師
田 中 英 一	TANAKA Eiichi	工学研究科機械情報システム工学専攻教授
琵琶 志 朗	BIWA Shiro	工学研究科マイクロシステム工学専攻講師
福 澤 健 二	FUKUZAWA Kenji	工学研究科マイクロシステム工学専攻助教授
細 江 繁 幸	HOSOE Shigeyuki	工学研究科電子機械工学専攻教授

第4回 「東山へ帰る日」実施の報告

庶務理事

酒井 康彦

(第37回, 昭和53年卒)



東山会の恒例行事となりました「東山へ帰る日」が、第11回(昭和27年)と第12回(昭和28年,旧制,新制)の卒業生をお迎えして、名大祭期間中の平成15年6月6日(金)に開催されました。皆様ご承知の通り、この行事は名古屋大学機械学科をご卒業後50年を迎えられた卒業生を母校にお迎えして、旧友や現職の教職員、東山会会員等との懇親を深めることと、日々発展変化している母校の姿と最新の教育研究施設をご視察いただくことを目的として行われています。平成9年の第1回以来、2年毎に開催されており、今回で4回目となります。今回の参加者は卒業生36名のほか、東山会および母校関係者など合わせて48名でした。

開催当日は若葉の隙間からそよぐ風がこちよく感じる好天となり、行事の集合・開始時間が14:00にもかかわらず、卒業生の中には早くから東山キャンパスを散策して、昔懐かしい思い出に浸っておられた方もおられたように思います。行事は改装後間もない工学部2号館にて祝賀会をおこない、続いて記念撮影、研究室見学・学内散策、そして最後に学内にあるシンポジオン・ユニバーサルクラブでの懇親会と、先回と同様に進められました。祝賀会では、安田副会長のご挨拶のあと、機械工学専攻の新美智秀先生(昭和52年卒業)により母校の現況が説明されました。引き続き、機械工学専攻の菊山功嗣先生(昭和39年卒業)から「流体工学研究今昔」と題する特別講演をいただき、水力実験室にて行われてきた研究の変遷と最近ご自身が推進されております風車に関する研究内容などを、液晶プロジェクターとパワーポイントを使用して華麗に紹介していただきました。特別講演のあとは、2号館南館玄関前にて記念撮影を行い、その後、6つの班に別れて研究室や創造工学センターの見学をしていただきました。とくに、新1号館の屋上や8階にある創造工学センターからの展望は素晴らしく、大きく変革する大学の様子が一瞥でき、卒業生の皆様には大好評でした。

懇親会は16:30から行われ、現職教官も交えて安田副会長挨拶をはじめ卒業生の皆様からは次々と面白い話も含めた興味深いスピーチをいただきました。卒業生の皆様には旧友とのご歓談のみならず、教職員や東山会関係者とも十分懇親を深めていただけたものと思います。

最後に卒業生の皆様の今後のご健勝をお祈りすると共に、今回の開催に当たり多大のご尽力をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。



東山会改革の現状と今後

現在、東山会は、名簿発行、会報発行、会計、事業、規則・細則等に関連した様々な問題を抱えています。既に過去2回の会報において東山会の現状についてお知らせアンケートを実施したため、会員の皆様方には東山会が抱える諸問題を認識されていると思いますが、これまで理事会ではこうした問題の解決策の議論および改革を行ってまいりました。今後も会員へのサービス強化、コスト・手間削減といった改革を継続して行ってまいります。以下では特に会計、名簿発行、会報発行、規則・細則の見直しに関して改革の現状と今後について書かれておりますのでご一読いただき、東山会の今後について建設的なご意見をいただければ幸いです。

会計の現状と今後

この数年来、東山会会員の同窓会に対する関心、活力が低下しつつあり、名簿発行収入により活動している会の会計は遠からず破綻することが懸念されています。そこで平成12年度以降、より多くの会員の関心と支持を得られる企画と安定した財源の確保を目指し財務の改革を検討してきました。

平成12年度には、収入安定のための改革案として、現行の終身会費制から年会費制への移行、新たな同窓会活動の企画による参加費収入の確保等、支出削減策としてIT活用による運営業務の簡素化について検討しました。さらに東山会名簿発行に際し、会員の意識調査を行いました。その結果、若年層向けの新企画の立案に対する要望等、東山会の活性化に対し積極的な意見がある一方で、名簿発行・販売方式に対して非常に強い反発があることが明らかとなりました。なお、運営費節減については、その活動の取り掛かりとして理事会連絡を極力ペーパーレス化し、電子メール活用により郵送費の削減努力を致しました。

平成13年度には、特に主要な収入源である会費、名簿発行、および主要な支出である会報発行の改革について検討しました。年会費制の導入については、これは避けられないとの見解が理事会の大勢でありましたが、まとまった見解を出すまでには至りませんでした。名簿および会報発行については、インターネットを利用したシステムにより簡素化を図る可能性を検討しました。その結果に基づき、平成13年度会報発行に際し、新規会員の会費を入会金/年会費制とし、終身会費を納付済みの会員に対しては協力金を毎年募るような体制への段階的な移行を検討し、IT活用などによる同窓会運営の合理化、会員に有用な情報・機会を提供する新企画の立案、を提案しました。これに対し、年会費制への移行や新企画の立案については同窓会に対する関心の程度により賛否両論でした。

平成14年度から15年度には、会報、名簿発行形態の改変を伴う大掛かりなシステムの改変の実行について検討した。会報、名簿の新しい発行方法に基づく収支見積を行い、同時に年会費制導入時の収入見込みを検討しました。その結果、既に東山会の現有資産では今回提案された新たな名

簿システムを立ち上げ維持する金銭的余裕がないことが明らかとなってきました。会計システムの改変は従来の主要収入源であった名簿発行の改変と連動することが前提であったため、これまで検討してきた年会費制への移行は平成16年度には実施不可能な見込みとなってしまいました。しかし、多くの会員から不評であった従来形式での名簿発行は中止することとしたため、運営資金の不足を広く会員に周知し、活動支援金を募ることとし、これを平成15年度総会に諮ることとしました。

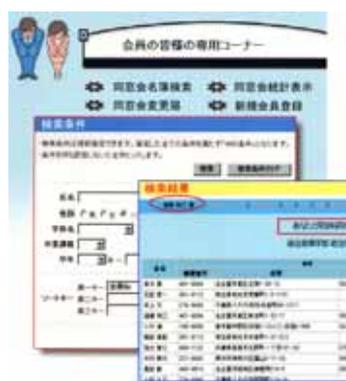
名簿の現状と今後

会員名簿は東山会と工学部同窓会とで、2年毎に交互に発行しており、名簿購入費と名簿に掲載する広告費が会の運営の収入源となっています。ただし、名簿発行間隔2年は名簿データの信頼性維持という観点からは長すぎ、多くの宛先不明者が生じており、名簿の利便性を著しく損なっているのが実情です。そこで、将来的には、従来通りの紙媒体からホームページ掲載管理に向けた改革が必要と考えられます。この形態では会員自身による名簿データの更新作業を行うこととなります。このような管理形態では、データ鮮度、コスト、名簿更新作業の手間の点でメリットを持つが、名簿購入費や広告費などの収入源を失うというデメリットを合わせ持つこととなります。管理システムを導入している大学も増えており、今後の会員数のさらなる増加、会員名簿データの有効利用による会員サービスの向上、名簿データ保守管理業務の効率化を考えるならばこの形態が必要不可欠となると考えられる。現在、ホームページ管理に向けた調査を行っている段階ですが、以下に概要を示します。

会員名簿のウェブ閲覧・登録システム構築

東山会のホームページから名簿データを閲覧・変更できるシステムの構築

- (1) WEBブラウザからの利用
- (2) 会員データの検索
- (3) 会員統計データの表示
- (4) カスタム名簿の発行（「年度別」や「職業別」等によるカスタム名簿のオンライン注文）
- (5) 会員自身による登録情報の変更
- (6) 会費未納会員への利用制限
- (7) 堅牢なセキュリティの確保



会員専用ページのイメージ

会報改革の現状と今後

東山会の運営において会報発行費用(郵送費を含む)の負担が極めて大きいという事実を鑑みて、以下の二つの改革により会報発行運営の合理化、コスト削減を図りました。

(a) 東山会ホームページ

(<http://www.higashiyamakai.com>)の立ち上げ

(b) 会報のPDF化

ホームページの立ち上げに伴い、東山会が発信する情報をより早く伝えると同時に会員からの声を聞くことがスムーズに行えることになりました。また、掲示板や会員の住所変更欄の設置により、会員間の双方向・対話型の利用が可能となりました。ただし、現在ホームページを利用している会員の数は少なく、今後ホームページを積極的かつ有効に活用することが期待されます。

年一回の会報発行に伴う経費およそ130万円であり、その50%を郵送費が占めています(図1)。そこで平成15年度から会報作成を外部委託せず東山会側で編集・作成するとともに、紙媒体としての会報を電子情報化し、ホームページから会報を閲覧する方式に切り替え50%程度の削減を目指しました。ただし、当面はホームページを見ることができない会員に対し簡易印刷したものを郵送することとし、今後はE-mailによる情報発信を積極的に活用していく予定です。

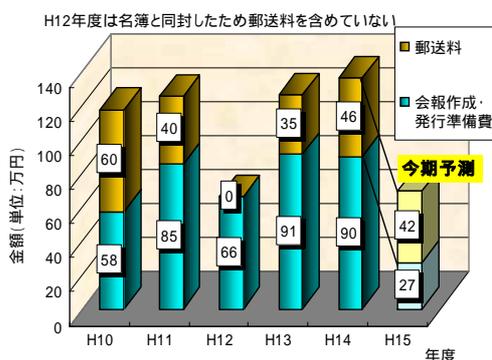


図1 会報発行に伴う経費と今期予測

規則・細則・東山基金運営規程の見直し

現行の東山会規則、細則、東山基金運営規程はそれぞれ、平成8年1月4日、平成9年2月7日、平成12年2月10日に改正されたものです。本会理事会では改革の一環として、これらの見直しの検討を行ってまいりました。その結果、現行の規則・細則は東山会活動の実態に合っていないことや、現在検討されている諸改革や差し迫っている大学改革(国立大学独立法人化)に対応するための柔軟性に欠ける点がいくつか指摘されました。そこで、理事会では、現行の規則・細則・東山基金運営規程の改正を審議し、次回の総会(平成15年1月10日開催予定)にて、東山会規則の改正案を附議することと致しました。主な改正点は以下の通りです。

東山会の目的の拡充(規則 第2条): 従来の規則では、本会の目的は「会員の親和をはかり、文化の進歩発展に資

すること」でした。しかしながら、大学を取り巻く社会情勢は大きく変化発展しており、東山会は、地球的規模で人類の福祉や文化の発展、並びに産業の振興に積極的に貢献していかなければいけなくなって来ております。そして、そのための人材の育成の支援が重要な東山会の役割と考えられます。そこで、本会の目的に関して以下のような改正案を出すことと致しました。規則 第2条 本会は会員の親和をはかり、また名古屋大学における本会の母体となる学科・専攻の学術研究・教育への支援を通じて人材の育成に寄与し、以って人類の福祉と文化の発展、並びに産業の振興に貢献することを目的とする。」

事業期間の明記(規則 第4条):

現行の規則には事業期間の記述がなく、活動の区切りが不明確でした。そこで、現状に適合するように以下の条項を新設しました。「規則 第4条 本会の事業期間は1期2年とし、5月1日に始まり翌々年4月末日に終わる。」

会員資格の変更(規則 第7条):

東山会正会員の範囲を以下のように拡張致しました。「規則 第7条 正会員は名古屋大学工学部機械系学科及び名古屋大学大学院工学研究科機械系専攻を由来とする学科(以下東山会母体学科・専攻と称する)の卒業生、修了生、並びに東山会母体学科・専攻に在職歴のある助手以上の教員とする。」

理事会の構成と役割の明記(規則 第13条、第16条):

現行の規則では、会計監査の役割が不明確であり、また理事会の構成員として認められていませんでした。そこで、会計監査を「監事」にあらため、

- ・監事の役割を明確にしました。

「規則 第13条 (4)監事 会の財務・業務を監督する。」

- ・監事を理事会の構成員としました。

「規則 第16条(一部) 理事会は会長、副会長、理事及び監事を以って構成する。」

基本金の内容(規則 第20条、第23条):

現在計画されている諸改革を遂行し、また、将来にわたり、東山会の活動をより活発にするためには、安定した財源を得ることが必要不可欠です。そこで、基本金として新たに「活動支援金」を加え、会員にご協力をお願いすることとしました。

「規則 第20条 本会は入会金、会費、活動支援金、寄付金及びその他の収入を以って基本金とする。」

「規則 第23条 本会財政への一層の協力支援を正会員に要請するため、会費とは別に活動支援金を設ける。1口2,000円として、原則として1口以上の納入を毎年要請するものとする。」

以上、主な改正点を列挙しましたが、皆様のご理解、ご協力をお願いいたします。

平成 16 年 東山会 総会・第 8 回新年同窓会のお知らせ

平成 16 年東山会総会・新年同窓会を、下記の要領で開催します。平成 3 年に現在の形の東山会新年同窓会第 1 回を開催してから、今回で第 8 回となります。毎回、多数の会員の方の参加をいただき、大学の現状報告、機械教室変遷の紹介のような企画と合わせて、名誉教授、機械系学科の現教官とあるいは会員どうしのご懇談をお楽しみいただいています。今回も楽しい同窓会となるよう、東山会理事一同、鋭意準備を進めております。お誘い合わせの上、多数の方のご参加をいただきたく、ご案内申し上げます。

なお、最初の 20 分間を東山会総会にあて、東山会の活動状況を簡単に報告させていただきたく予定です。こちらにもご参加をお願い申し上げます。

記

1. 日時：平成 16 年 1 月 10 日（土）
12:30～15:30（この時間内は出入り自由）
2. 会場：名鉄グランドホテル 11 階（柏の間）
〒450-0002
愛知県名古屋市中村区名駅一丁目 2 番 4 号
<http://www.meitetsu-gh.co.jp/mgh/index.html>
3. 会費：8,000 円
申込締切 12 月 15 日（月）
当日受付もいたしますが、整理の都合上、なるべく同封の払込用紙にてお申込みください。



東山会関西支部 第 41 回支部総会

本年第 41 回支部総会は平成 15 年 11 月 15 日（土）11:00 より 15:00 まで大阪中央電気倶楽部で行います。在阪の会員の皆様、お誘いあわせの上、是非参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

1. 日時：平成 15 年 11 月 15 日（土）
11:00～15:00
2. 会場：大阪中央電気倶楽部
大阪駅から中央電気倶楽部まで徒歩約 10 分
〒530-0004
大阪市北区堂島浜 2 丁目 1 番 25 号
TEL: 06-6345-6351
FAX: 06-6345-6877
<http://www.chuodenki-club.or.jp/>

3. 会費：8,000 円



関西支部便り

関西支部 支部長
白木 博明
(第7回 昭和23年卒)



第40回支部総会は、平成14年11月16日、大阪中央電気倶楽部で、本部より新美智秀(S52)大学院教授(機械工学専攻・機械エネルギー講座専攻)が、本部代表と大学の近況報告を兼ねて来阪された。本部挨拶としては、東山会本部の財政基盤の確立のため、苦勞されていて、本年は新提案が具体的になされる予定である。名古屋大学が日本の中核大学として21世紀プログラムを始め、大学評価、産学官連携で大活躍されている状況は、昨今の新聞紙上でも頼もしく拝見している。ご承知のごとく大学の独立行政法人化は、明治以来の大改革で、象牙の塔に競争原理が導入される訳で、我々関西支部では企画幹事の担当で本部の資料をもとに平成15年支部報で(特集 名古屋大学を知る)と題し、特別記事を組むことができた。21世紀を前に平成12年に基本理念として制定された名古屋大学学術憲章、これに基づくアカデミックプラン、名古屋大学全学同窓会、名大総長の大学院入学式式辞、事実大学院入学者の数が学部入学者よりも多くなった二つの総長祝辞などである。

特別講演は川本利治氏(S33)にお願いした。現在社会保険労務士として活躍されているが同氏は新日鉄時代、田中首相が毛主席から最初に中国の製鉄事業の技術移転を要請された翌年、73年から80年最初のプラント検収まで現地であって、中国人と付き合い、その後も幾度か友好訪問をされ、中国人の国民性については熟知されておられる。大国中国と日本の難しい関係を今日のよい関係に転化されたのも、絶えず笑みを絶えさない氏の人柄があればこそと思う。

総会報告では、支部長ご挨拶、担当幹事の会務報告、会計、会計監査、の報告があり、可決承認された。

関西支部長の会員訪問は今年度より企画編集幹事の大役を担って頂くことになった和田滋恵氏(S43)に同道願って、大阪大学大学院工学研究科電子制御機械工学専攻教授の白井良明氏(S39)に登場頂いた。大阪大学はロボカップで有名であるが、白井教授は阪大にあって、当初から産業ロボットから身近なロボットまで一連の研究で世界的に活躍されている。名大の福田教授は早大の、阪大の白井教授は名大のご出身。

我が生涯学習では土川昭氏(S27)が“邦楽と私”と題する干天に慈雨の感がする優雅なご趣味を寄稿された。同期の乾昇氏(S3年)は名古屋大学遠州会の実質“名古屋大学遠州支部”?全学同窓会の先取りしたような活動状況を寄稿された。若山義恵氏(S41)は現在、塩野義製薬で医療製品監査の重責にあるが36年間の東山会員として雑感をまとめておられる。大阪ガスの菊田隆氏(S45)産学官連携について第一線からの科学技術政策提言投稿にも深謝したい。

懇親会は萩原幹事の司会で、老いも若きも垣根を取り外し談笑するのは従来通り。呉市より黒田博氏(S33)が初参加。技術コンサルタントとして活躍中。途中、囲碁同窓会は青山幹事より、ゴルフ同好会は野崎幹事より成績発表された。例により学生歌、寮歌を歌い再開を記して今年は三本締め。

本年第41回支部総会は平成15年11月15日(土)11:00より15:00まで大阪中央電気倶楽部で行います。時間を早め、会費も安くしました。東山会本部より新進気悦の酒井康彦(S53)大学院教授(工学専攻科機械情報システム工学専攻)が来阪され、大学の近況を講演して頂きます。先生は東山会本部の庶務理事を兼ねておられるので、本部の動きについて、直接語って頂ける予定です。飛び入りで結構です。同期は勿論、在阪の友を誘いぜひ参加ください。関西支部の会員はこの情報が先に入るのでe-mailで同窓諸兄に知らせてください。本部の会報は支部会報より遅くなりますので。

支部幹事の動静としては会計監査、森瀬和信氏(S28)が薬石効なく平成14年4月1日逝去されました。5月9日のお別れ会に支部長が代表して同期の諸氏とともに献花し、遺品を前に在りし日を偲びました。後任の会計監査には野崎利雄氏(S29)にお願いしました。

また、支部会則により本年総会の日をもって白木支部長は退任し、本部理事も退任させし頂きます。後任支部長として清水義人氏(S31)が支部幹事会で内定し、全支部会役員が承認される予定です。思えば平成9年度に就任し平成15年度まで7年間、支部会員及び本部理事諸兄のご支援ご協力により、力一杯、伝統ある関西支部の仕事をさせて頂きました。特に支部幹事諸君にはご家族様を含めたご協力をおかけました。厚く感謝申し上げます。東山会と同窓諸兄の益々の発展を祈り退任の挨拶とします。



会員からの便り



甚六の50年

谷 浩 二

(第12回, 昭和28年卒)

昭和28年は第二次世界大戦以前からの学校制度による所謂旧制大学卒業生と戦後の新学校制度による新制大学卒業生と一緒に卒業した年です。私達は新制大学最初の卒業生なのでクラス会の名前を「甚六会」としています。

新制大学の一回生として思い出されることは、本来一年先輩である旧制大学卒業生との比較でした。特に就職に際して、新制大学卒業生は旧制に比べて修学年数が少なく学力が低いという理由からか、大会社からの求人票の中には「旧制に限る」と書かれているのがあったのは残念でした。それでも先生方のご尽力と進んで人材を確保しようと言う企業もあって大学院へ進んだ数名以外は就職出来たと記憶しています。

今年は卒業50周年に当たりますので卒業50周年記念の文集「甚六」を作りました。現在消息の明らかなメンバーが51名で、その内36名と、機械学科で我々のクラス担任だった今なお元気な西村融先生と物故者の奥様お一人を加え38名による文集が出来ました。内容は各自が自由に選んだので色々なテーマで書かれていますが、やはり社会人となつてからの経験を書かれたのが多く、我々が世の中の発展に関わってきたことが感じられます。この中で西村先生はこの50年の世の中の変化が大きかったことと、50年の意味として更にその50年前は日露戦争の前年であることに言及されていますが、これからの50年も大きな変革があるものと予想されます。より豊かな世の中へと進んで来たものが、資源と環境の問題で進歩の方向を変えて行かねばならないようになって来ました。機械屋の仕事としては今まで以上に省エネ、省資源に努めなければならないし、リサイクルや高齢化対策に知恵を出さなければならない時代だと思えます。

一方50年前は朝鮮戦争の終わった後でしたが、朝鮮半島の緊張は今なお続いていますし、冷戦が終っても民族の対立、宗教の対立、独裁者による緊張など科学技術の進歩では解決しない問題があり、これらについても無関心でいられない50年でした。



土田 和 男

(第22回 昭和38年卒)

まず、投稿の場を与えていただき、感謝です。現在、1年半後の開港を目指して工事中の中部国際空港の地元、常滑市の市議会議員の2期目を勤めております。卒業後、工作機械メーカーの現オークマ(株)に30年、窯業機械メーカーの(株)石川時鐵工所に5年間、共に最新のNC工作機械を通じて、日本、いや世界の産業界の発展に充分寄与してきたと思っています。中でも、長岡振吉博士の絶対値方式の普及に少しでも寄与できたこと、最後の5年間をユーザサイドで、設備・生産からCADによる商品設計まで、小企業の生きざまを体験できたこと、これらは、誇りに思うし、現在の活動エネルギーになっております。

空港関連工事は、関係各事業体の懸命の努力で着々と進行しており、心から敬意を表したいと思います。これだけの一大プロジェクトの事業費の圧縮に加え、開港日の1ヶ月前進は、実にすごいことです。

当市にとってはまさに街づくりそのものであり、中部の玄関にふさわしい「世界に開かれた生活文化都市」をいかにつくりあげるかという重要課題ですが、この部分の説明は、残念ながら、紙面の都合上、割愛です。

そのことより、この身になって、是非、みなさんに訴えたいことがあります。それは、我々年代の「次世代への責任」ということです。現在、この国が抱えている課題は「少子高齢化」と「公共心の減少」と思っています。出生率2以下では、この国はなりたない。自己中心的で、国も市町も要らない人が多くなって、この先どうするか。

高齢化」は我々ががんばってきた結果だから、誇って良い。我々、仕事は一生懸命やってきて、NHKの「プロジェクトX」に代表される数々の仕事を成し遂げてきたが、「子育てを母親に丸投げ」が、多過ぎたのではありませんか。その結果の最近の世相。「構造改革」、「経済政策」の「根本施策」に、企業で養ってきた「人づくり」を家庭で、地域ではじめようよ。もうひとつ「高齢化」、世話を焼かせる長生きはしない、いや、したくないですね。元気を保ちながら、「社会貢献に生きる」を掲げて、もう一花も二花も咲かせようよ。こんな想いで、さっ、明日からもがんばるぞーっ。



= 北米走行 =

トヨタ自動車

横 矢 雄 二

(第32回 昭和48年卒)

入社以来シャシー設計と製品企画に従事し現在はレクサス企画部を担当している。北米専用車の製品企画を担当した時の北米走行の話である。

駐在経験がなく北米市場を知らない私が2代目シエナのモデルチェンジを担当せよとの指示を受けたときは正直驚いた。そこですぐに初代シエナでキーウエストからロサンゼルスまでの大陸横断を実行した。走行中に気づいた要改良項目をその日のうちにe-mailで全チームメンバーに送った。最初は驚いたメンバーも事態を理解し、より詳細な状況を教えろと返信をはじめた。こうして大陸横断ドライブ中に日米のメンバーとメールのやり取りをしながら次期車の開発プロジェクトがスタートした。

その後の3年間にカナダ全13州・US全50州・メキシコ全32州、ジャマイカ・プエルトリコ・バージン諸島などを含む、計5回の大陸横断と合計85,000kmにのぼる北米走行を実行した。これは地球2周に相当する。

日本に住んでいて月1回にも満たない出張中にこの距離を走るのは大変であった。夏休みを2度完全につぶしたが、横断といっても走る距離ははれている。例えば最長のカナダ横断(ニューファンドランド島-バンクーバー島)やロッキー縦断(アラスカ-メキシコ国境)はせいぜい1万km。5回の横断で走った距離はたかだか3.5万kmで、残りは出張中に1度しかない土・日の休みに一人で走って稼いだものである。金曜日の業務を終え夜行便で目的地に飛び2000km程度走り日曜の夜行便で仕事に戻るといった少々無謀なことを繰り返した。

全州走破は日程と体力的にはとても厳しかったが多くの経験ができた。例を挙げてみる。

はじめてのメキシコ走行はシティからアカプルコまでの400kmと短く設定し、お昼には到着し午後は浜辺で・・・と決めた。アメリカの安楽ドライブと現金無用のクレジットカード社会に慣れていたので、わずかなペソを手に、空港で地図を入手し損なったまま走行を開始した。正確に言えば日本のガイドブックに載っていた地図があったが、メキシコ-アカプルコ間の道路はたった1本でその全長はわ

ずか30mmで示されていた。シティは2000万人を抱える世界最大の都市だが、ガソリンスタンドには地図がなく道路は複雑に入り組み、運転の粗さはパリやローマ以上であった。人々はとても親切だが言葉が通じず道を聞いても無駄であった。結局シティから脱出しアカプルコへの有料道路を見つけたときにはお昼を過ぎていた。レストランもスタンドも頻繁に現れる料金所も現金しか通用せず、すぐにペソはなくなりその先は延々とUSドルでの支払い交渉となり、アカプルコに到着したのは夕方となった。思惑は見事にはずれたが、メキシコの複雑な道路事情と親切な人々の姿はくっきりと記憶に焼きついた。

カナダ・ヌナブト準州は99年に独立したイヌイットの自治州で、広大な北極圏の領土に人口わずか約2.5万人。やはり休日を利用して小さな町へ走りに行った。飛行場に着くとレンタカー会社はなく走る車がない事態となった。そこで英語がよく通じないイヌイットの運転手と長い交渉の末タクシーを借り出すことに成功した。町はとても小さく1周するのに要した時間の方が交渉時間より短かったが無事カナダ全州を完走できた。

最近、妻と2人で毎年ヨーロッパにドライブに行くのだが、地図に加えボイスナビ(=妻)もあり1日の走行距離もずっと短いのだが、一人でドライブするときよりよく道を間違えるし、疲れがたまるのは何故だろうか。

~ 帰国報告 ~



三菱電機(株)

加 藤 庸 嘉

(第42回, 昭和58年卒)

今春4月にドイツ駐在を終えて、再び名古屋の職場に戻ってきました。

約3年半の海外生活でしたが、新世紀の幕開けやユーロ統一通貨への切替など、ちょうど21世紀に移り変わる歴史的節目やイベントを欧州で体験する機会に恵まれました。

赴任期間中は、ドイツを起点にいろいろな国を訪問する機会に恵まれましたが、単純に“欧州”の一言でくることができない複雑性と多様性を、よく実感したものです。

わずか時差が1、2時間の地域にひしめく西欧州主要国の国境越えは、EU圏の統合化もあってほとんどパスポートチェックも行われず容易になった現

在です。

ところが、国を越えた時点から標識や看板の言語が変わるとともに、そこはもう民族も文化も違う・・・といったように、島国民族の日本人にとっては奇異な世界でした。

また私は仕事上で、ドイツ人以外の他国欧州人とも交流する機会がありましたが、それぞれの国によって考え方や生活のリズム、習慣が異なり、このことは欧州内の複数国を相手に仕事をする上では、言葉の壁以上に障壁となることも少なくありません。

生活や仕事を通じて、常に欧州の文化、歴史、国民性といったことを、意識したり勉強させられたりした日々でしたが、帰国した今もテレビや新聞などで欧州の話題があれば、懐かしさも手伝い興味深く見入ってしまいます。

ところで戻ってきて思うのですが、ここ数年で日本は欧州以上に随分と変化が激しい国であることを痛感させられています。赴任前後で各省庁の改変や統廃合された銀行など、社会システムも経済も激変の時代であることを感じています。

また各種技術商品に関しては、自動車や携帯電話等に代表されるように、機能面やデザイン面も短サイクルでかなり様変わりしていて、変化を好む日本人の性質がうかがえます。

歴史と文化を重んじ、どちらかと言うと保守的な欧州気質に慣れた私でしたが、飽くなき革新性と変化を追求する日本社会に乗り遅れないように、日々奮闘しているこの頃です。

デンマーク語の Å (デンマーク語アルファベット の最後の3文字)



(株)豊田中央研究所
川 本 敦 史
(第50回 平成5年卒)

平成5年に学部を卒業し、平成7年に博士課程前期を修了後、(株)豊田中央研究所に入社いたしました。在学中は福田教授ご指導の下マイクロマシンの研究を、入社後は主にエンジンの振動問題を対象に柔軟多体系の研究をして参りました。そして平成13年から3年間の予定でデンマーク工科大学数学科に博士課程の学生として留学しています。

安城が「日本のデンマーク」と呼ばれているのは有名な話？ですが、おそらく一般の日本人には馴染

みが薄いと思います。デンマークを一言で形容すると「人と環境にやさしい」です。確かに農業は盛んで、環境への負荷が少ない有機農法のさきがけです。また、風力発電用の大きな風車を見かけたらほぼ間違いなくデンマーク製です。70年代に原子力発電所の建設が各国で進む中、デンマークはあえて原子力に依存せず自然エネルギーの利用を選びました。

デンマークでは保育・医療・福祉システムなど生涯を快適に暮らすためのインフラが充実しています。子育てを家族の問題だけでなく国防上の問題と捉えているようで、人口約500万のこの国の明日を背負って立つ若い世代の育成に熱心です。政府が面倒を見るので大学を卒業するまで実質的にお金がかかりません。それどころか大学生には生活費が支払われます。したがって、子供の養育費を心配して子供を作らないという問題はありません。夫婦共稼ぎが普通のデンマークで少子化に歯止めがかかっているのも理解できます。この一見して理想的な社会システムを支えているのは、国民が納める非常に高い税金です。社会主義が例外的に成功した国という人もいます。国民の合意によるとは言え、どうやって労働意欲を維持しているのか不思議です。税金の使途が明確なものと汚職が少ないのも一因でしょうが、それだけではないような気がします。毎朝、棧橋から素っ裸で海に飛び込む元気なデンマーク人を眺めながら、真の豊かさとは何かを考えさせられるのでありました。



学生との違い
日産自動車(株)
佐 藤 光 彦
(第62回 平成15年卒)

この原稿のご依頼を承って見たのもの、諸先輩方の文と同様に扱っていただけののかと思うととても光栄であると同時に大変恥ずかしい思いでいっぱいです。まだ社会人になって間もないため、社会人としての経験も浅いので、学生時代とのいろいろな違いについて、私の視点や経験から、お伝えしたいと思います。

まずは就職する前の話。私は大学3年目の後半から、就職を意識するようになり、いわゆる就職活動を文系の学生並みに精力的に続けてきました。今から考えてみれば、もちろん最終的に自分の身を置く会社は一つなのだからあれほどやらなくても、と思

うところもありますが、多くの説明会や面接等を通して初対面の大人の方々と接することができるのは就職活動中の学生の特権であるという気持ちがあったので、大学推薦をもらうことは考えませんでした。事実、あの活動を通して、大人の方々と接するにあたり、活動以前とは違って堂々と自分の考えを述べられるようになったので、結果としては(就職そのもの、というよりも)自分自身の成長につながっていると感じています。

次に、社会人になってから。“社会人”というのはまだまだ肩書きのみで、入社当時のことをお伝えしましょう。わずかに一週間前に大学を卒業したばかりだということに、学生時代とは違う、あの緊張感。生まれて初めて出会う多くの仲間達と共に入社式に臨み、その日の夕方からはTOEICを全員が受験させられました。私の会社に限らず、今では英語の能力を必要としない会社はないくらいだ、と学生の頃から聞かされていたので、英語とは今後もいやでも付き合い合わなければならないようです。この結果は配属後に上司に伝えられる、とのことで、普段のTOEICでは感じない緊張感があの日にはあり、終わった時にはずいぶんヘトヘトになっていたのを覚えています。

続いて、2ヶ月にわたる研修で、会社のルールや技術部門に配属されるに必要な知識等の講義、演習が毎日繰り返されました。これは再び学生に戻ったような感覚もあったのですが、今思うとこの期間は大変重要だったと思います。それは、知識や技術等はこの期間だけで身につくものでは到底ないものの、それ以上に同期入社の仲間達が日に日に増え、人脈が出来上がっていったからです。研修期間は毎日席を並べて講義を受けていても、各部署に配属されればバラバラなので、そういうときにこそ同期のつながりをどれだけ持っているかが仕事を含む人生の成功のカギを握ると言われているからです。また、このあたりから、週末の貴重さが感じられるようになってきました。学生時代とは比べ物にならないくらいの情報量を毎日こなしていたため、平日はもうヘトヘトで、だからこそ特に金曜日の晩が学生時代以上に待ち遠しくなっていたのです。

そして、部署に配属。私の記憶から言えば、あれは入社式当日以上に緊張した日でした。なぜならその後長くお付き合いさせていただく会社の上司、先輩方に“お披露目”する日だったからです。私の配属されたところは車両設計部署で、特に私のいるグループは車体(ボディー)を担当し、私はその中でもドアを受け持っております。ドア、という見た目目は車体の中でも比較的小さいのですが、お客様が一番初めに触れる部分であり、そして安全面や使

い勝手の点から、予想以上に多くの部品から構成されています。ですからなくてはならない部分なんです。現在私はそのドアを構成するそれぞれの部品のリストを整理したり、各部品メーカーにそれを発注する仕事をしています。一口に“設計”というと、これらの部品の形状をはじめから図面で描くことのみを予想していたのですが、むしろそのような作業は部品メーカーの方や専門の方にお任せして、出来る部品をどのように配置し必要に応じて図面の検討も行う、といった作業が主なものになっています。ですが、これも立派な“設計”の業務であることは間違いありません。

こうした中で、部署の上司の方がおっしゃいました。お金を払っているいろと教えてもらうのが学生で、知識や技術を自ら先輩たちより受け継ぎ(これを上司は“盗む”とおっしゃっていました)お金をもらうのが社会人だ、と。なるほど、と思いますね。会社では、黙ってても知識や情報は勝手には入ってきません。教科書があるわけでもありません。しかし多くの知識等は先輩方や過去の製品のデータに入っているの、そういうところから自分のものにせよ、ということなのです。

また、先ほどの英語に関してですが、私の会社内の共通語は英語である、というのはある程度事実でした。同じフロアに外国人の方があれほど多くいらっしゃるとは。そのため英会話を過去に習っておいて助かりました。普段の会話でも、電話でも、文書でも、英語を避けては通れず、私自身も先輩からある文書の和訳、英訳を任された事もあります。ですので学生の皆さんは、人より少しでも多く、英語の学習を進められることをお勧めします。

最後になりましたが、これから長く続く社会人生活、どのようなことが待っているかわかりませんが、何より必要なのは健康だと思っておりますので、健康第一にがんばっていきたく思います。また、同期の中にも社内の諸先輩の中にも名大卒の方が多くいらっしゃるので、そうした方々をはじめ、人脈を大切にしていきたいと思っております。

稚拙な文ですが、最後までお読みいただき大変ありがとうございました。東山会の更なる発展をお祈り申し上げます。

新任・着任の先生のご挨拶

本年度は、機械工学教室に長谷和徳助教授(機械運動学)、山本和弘助教授(環境情報システム)、古畑講師(統計シミュレーション工学)、今村博講師(移動現象工学)、中村祐二講師(環境情報システム)、廣田健治講師(生産プロセス工学)、鈴木教和助手(超精密工学)、森英男助手(機械エネルギー工学)、久保貴助手(統計シミュレーション工学)機械工学教室と関連の深い電子機械工学教室に鈴木達也助教授(集積機械工学)、稲垣伸吉助手(集積機械工学)、マイクロシステム工学教室に大岡昌博助教授(マイクロ計測工学)、森島昭男講師(生体医療マイクロ工学)、董立新助手(マイクロ制御工学)、奥村大助手(マイクロ材料システム)、加藤大香士助手(生体医療マイクロ工学)が新しく着任されました。長谷助教授、山本助教授、大岡助教授、古畑講師、今村講師、中村講師、廣田講師、久保助手、稲垣助手、董助手、奥村助手、加藤助手から東山会会員の皆様にご挨拶を賜りましたので、ご披露させていただきます。

なお、機械工学教室の中本助教授は千葉大学、趙黛青講師は中国科学院広州能源研究所、電子機械工学教室の尾形講師は大同工業大学、マイクロシステム工学教室の長谷川助手は筑波大学、松田哲也助手は三重大学にそれぞれご栄転されました。



はじめまして

機械工学専攻
機械運動学講座
長谷和徳

平成15年4月1日付けで機械運動学講座の助教授として着任いたしました長谷和徳(はせかずのり)と申します。着任以前は独立行政法人産業技術総合研究所に在籍していました。また、私は慶応義塾大学卒修了ですので、名古屋大学のお世話になるのは今回が全くの初めとなります。関東以西に住むのも初めてであり、文字通りの名古屋初心者です。

私は大学学部生時代には機械工学の教育を受けていますが、研究としては、歩行などの人間の日常生活動作の運動力学分析や、計算機シミュレーション技術の開発など、機械ではなくヒトを対象とした

テーマに取り組んできました。本学においても身体動作支援工学、福祉工学など人間と機械の接点となる研究に取り組んでいきたいと思っています。

名古屋大学にはアカデミックな雰囲気と優れた教育研究環境があり、ここへ来て本当に良かったと実感しています。私のポジションは、実は任期付という条件であるため、本学への在籍期間は限られてしまいましたが、名大に所属していたことを誇りに思えるように、また少しでも本学や皆様のお役に立てるように精進いたします。よろしく願いいたします。



着任挨拶と抱負

機械情報システム工学専攻
環境情報システム講座
山本和弘

平成15年4月に機械情報システム工学専攻の助教授に着任いたしました。現在の研究分野は燃焼です。燃焼は流れ、熱・物質輸送、化学反応が関連する複雑な現象です。研究内容は、実用燃焼器を想定した強い乱流場に形成される火炎をレーザ計測により調べています。また、現象をより小さなスケール(メソスケール)から解析する格子法(格子ガス法、格子ボルツマン法)を用いて、多孔質内や多成分系の反応流れを計算しています。

前任地は豊橋技術科学大学です。偶然にも名古屋大学との再編・統合の話が出ておりますが、大学は法人化など激動の時代にあり、大学の環境が大きく変化しています。大学発のベンチャー企業の出現や研究成果を技術移転するなどの動きも出ています。大学での研究成果が社会で必要とするものにつながるような意識を持って研究に取り組んでいきたい。

最後に自身の抱負です。私は平成11年に在外研究員として米国立ロスアラモス研究所に滞在しました。最も印象に残ったことは、異分野の研究者が情報を交換し、積極的に議論する姿勢でした。もちろん自分の専門を深めることも大事ですが、それに埋没するのではなく、分野を異にする研究者と交流することが大切であると感じました。教育者・研究者としての巾を広げ、自分を磨く努力を積極的にしていきたいと思えます。



再びお世話になります

複雑系科学専攻
複雑系計算論講座
(兼任 電子機械工学専攻
知能計測講座)
大岡 昌博

平成15年4月1日付で表記の助教授に着任いたしました。平成3年名古屋大学 工学部 電子機械工学科講師、平成4年静岡理工科大学 理工学部 機械工学科助教授を経ての再度の着任です。

前職では、人間の感覚を計測する心理物理実験法を学びました。人間の心は、直接測ることができません！「普通では測ることができないものを測る」手法に素朴に興味を覚えました。

機械屋にとって馴染みの深い応力も、直接測ることができない物理量ですが、既知荷重を加えセンサをキャリブレーションしておくだけで精度よく計測できます。これに対して「心の計測」では、このような単純なキャリブレーションはできず、数多くの実験結果からようやく1つの客観量を求めることができるというものです。

私は、大学院の博士課程を修了して以来今日まで、触覚センサおよび触覚情報処理の研究を進めてまいりました。さらに、前職で心理物理実験法を学んでからは、これまでの研究を2つの方面へと発展することを始めました。一つは、新しいロボットの制御方法・知能化へ適用することを目的として、人間の触覚認識の仕組みを調べる研究です。もう一方は、触覚のバーチャル・リアリティに使用する触覚ディスプレイの設計・評価法に心理物理実験法を応用する研究です。

研究対象が人間ですので、機嫌や調子が悪い日があって難しい面が多々あります。『普通の物理現象を対象とする研究ならもっとラクなんだがなア。』と思うことも時にはありますが、マシンと人間のインターフェースが求められる昨今では私の研究もいつの日か日の目を見ると信じて精進しております。

今年から、研究環境が格段によくなったので、「触覚」だけでなく「視覚」、「聴覚」、「嗅覚」、「味覚」などの他の四感にも研究範囲を広げ、多数の感覚入力から環境を理解し、意思を決定する問題へと発展してまいりたいと考えております。

東山会の皆様には、11年前よりいっそうお世話になることと存じます。今後とも宜しく願いいたします。



新任挨拶

機械工学専攻
移動現象工学講座
今村 博

平成15年1月1日付けで機械工学専攻移動現象工学講座（菊山功嗣教授）の講師に着任いたしました。三重大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程を修了後、本学の機械工学専攻博士課程後期課程に進学、菊山先生のご指導の下「水平軸風車ロータ周りの流れに関する研究」を行い、平成8年3月に修了いたしました。修了後、機械工学科助手を経て、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の産業技術研究員としてつくばの工業技術院機械技術研究所（現産業技術総合研究所）に勤め、その後平成10年9月より横浜国立大学工学部生産工学科で4年間助手として勤務し、巡り巡ってこの度の着任となりました。

学生時代から風車周りの流れ場に関する研究を行って参りました。風車に関する研究を行っているという点、以前は「夢があっていいですね」とか「もう完成された技術で研究課題はないのでは？」と言われたものですが、最近では「今話題ですね」という反応がまず返ってきます。風車の歴史は古く、最初の風車は紀元前2000年頃にまで遡るといわれていますが、発電システムとしての「風力タービン」が普及するのは1970年代からです。主に欧州で発達した風力発電技術ですが、平坦な地形の多い欧州と比べ、日本の場合年間平均風速の高い地域は山岳地や海岸線など複雑な地形が多いため、流れの非一様性・非定常性は平坦地と比較して大きく、風況予測、疲労寿命予測、制御方法など克服すべき課題が広い分野に渡るのが現状です。最近では、欧州の技術に頼るのではなく、日本の風況に適した新しい風車を開発しようという機運もあり、「風車工学」は今後も更なる研究・開発が必要とされる分野です。私はこれまで風車について、風洞実験、数値シミュレーション、フィールド試験、規格作りなどの研究・開発に取り組むことにより関わってきました。菊山研究室では、私が学生として在籍していた時から、風車に関する基礎研究を行っておりますが、これまでに様々な場所で得た経験を生かして、新しい「風」を呼び込めたらと思っております。

また、教育（education）に関しては、横浜国大在任中に創造性工学実験を担当し、特に学生の創造性を引き出すにはどうすればよいのか取り組む機会を得ました。その中で「独創とは蓋然の先見であ

る」という言葉に出会いました。独創を創造と置き換えて考えてもよいと思いますが、「できそうな事」を見通すには、その分野の基礎を自ら学び修得することがやはり不可欠で、それが「これまでになかった新しく有用な解決法を導く」創造性につながる一歩になると考えています。そこで、教官の立場として、特に学生の自主性(やる気)が「educate」されるように、これまでで得た(これから得る)経験をできる限り伝えていきたいと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願いたします。



着任挨拶

機械情報システム工学専攻
統計シミュレーション工学講座
古畑 朋彦

平成14年12月1日付けで機械情報システム工学専攻統計シミュレーション工学講座(酒井康彦教授)の講師に着任いたしました。出身は東北大学で、平成6年3月に同大学化学工学専攻博士課程後期課程を修了し、その後同専攻の助手を務めさせていただきましたが、平成9年8月に本学の高温エネルギー変換研究センターに異動となり、故新井紀男教授の下で独創的な高効率ガスタービンの開発に関する研究に取り組みました。この間一貫してガスタービン燃焼器など実用装置内の熱流体および物質の移動現象を対象とした数値モデルや数値シミュレーション法の開発を進めて参りました。

機械工学と化学工学では、同じ流体や熱を対象としていても、見方や考え方が異なることに戸惑いを感じておりますが、最終的に目指しているものは本質的に変わらないと思います。今後は乱流というキーワードを中心に新たな観点から勉強させていただきたく存じます。

東山会の皆様そして本学の先生方にはこれからもお世話になることが多々あることと存じますが、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

燃焼と超伝導とエネルギー

理工科学総合研究センター
総合エネルギー科学RG
第7研究室
中村 祐二



平成15年4月付で、理工科学総合研究センターの講師に着任致しました。5年間、本学の機械情報シ

ステム工学専攻の助手として燃焼研究を行ってまいりましたが、本年度からは新天地で教育・研究活動に従事して参ります。

当センターでは、循環型エネルギー社会の確立を目指し、様々な分野の研究者が集い、様々なアプローチにより問題解決に取り組んでいます。本研究室では、電気系出身の大久保仁教授をはじめとして「超伝導技術の応用に関するR&D」を行っており、私は主に極低温場での熱処理に関する諸問題を担当しております。

同じ「熱関連のエネルギー問題」とはいえ、高温を扱う「燃焼」と極低温を扱う「超伝導」とのギャップは想像以上に大きいものでした。しかし、新しい研究分野に挑戦するのは楽しいもので、現在では燃焼という非線形現象を扱う経験を生かして、超伝導状態に見られる非線形特性を解明しようと燃えています。

近い将来、法人化、各センターの統合等、大学自体が大きく変化します。その中でも見た目のギャップに振り回されずに、挑戦を忘れることなく教育・研究に勤しむ所存です。今後とも東山会の皆様からの叱咤激励の程、宜しくお願申し上げます。

新任挨拶

工学研究科留学生専門教育教官
(兼任 機械情報システム工学専攻
生産プロセス工学講座)
廣田 健治



平成15年6月1日付けで工学研究科留学生専門教育教官講師に着任いたしました。国際交流室の運営スタッフとして工学研究科の留学生に対する相談や教育の支援、および留学生派遣などの国際交流事業を担当しております。また、機械情報システム工学専攻の講師も併任となっており、生産プロセス工学講座で研究指導を行っております。これまで同専攻において近藤一義元教授、森敏彦教授にご指導いただき、塑性加工を中心とした生産加工技術に関する研究を行ってきました。当該分野では微細、高精度化に加え環境負荷を考慮した物造りが求められており、複雑形状部品を従来より低エネルギーで精密に成形する工法や端材を利用した微細部品成形等の課題に取り組んでいます。また、東山会では名簿理事を務めさせていただいており、微力ながら東山会の発展に貢献したいと思っております。今後とも、会員の皆様方のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



新任挨拶

電子機械工学専攻
集積機械工学講座
稲垣 伸吉

平成15年4月1日付で電子機械工学専攻の助手に着任しました。集積機械講座(末松研究室)の一員として働かせていただいております。専門は、自律分散システムとそのロボティクス(特に歩行ロボット)への応用です。

私は平成12年に名古屋大学電子機械工学専攻博士前期課程を修了し、そこから3年間、今年の春まで東京大学大学院工学系研究科精密機械工学専攻の博士課程で勉強しておりました。したがって、学生から教官へという立場の変化はありますが、まさに古巣に戻ってきたという表現がぴったり当てはまりません。

自律分散システムとの出会いは学部4年生の研究室配属のときです。その後指導していただくことになる湯浅秀男先生(当時石田研究室講師)のお話に深く感銘を受けたことを今でも思い出します。お聞きのこととは思いますが、残念ながら、湯浅先生は去年9月に他界されました。すばらしい先生と出会って今の自分に至ったことを考えますと、教育現場への貢献に対する責任感をひとしお感じております。

さて、今年末松研究室は、末松教授の特殊レンズを用いた視覚システム、ホームロボットやからくり、鈴木助教授のハイブリッドダイナミカルシステム、そして私の自律分散システムと異なる研究分野を併せ持つ研究室となりました。まだまだ勉強の段階ですが、異なる分野の融合を図りながら、新たな研究分野への開拓を行っていきたいと考えております。

最後になりましたが、東山会の皆様には今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。皆様のご健康とご活躍をお祈りして、挨拶の結びとさせていただきます。



新任挨拶

高効率エネルギー変換研究センター
ケミカルガスタービン基盤研究分野
久保 貴

平成15年5月1日付けで高効率エネルギー変換研究センター・ケミカルガスタービン基盤研究分野の助手に着任いたしました。平成12年3月に中村育雄

名誉教授のご指導のもとで機械情報システム工学専攻博士課程後期課程を修了後、約3年間(株)日立製作所に勤務しておりましたが、5月より高効率エネルギー変換研究センターの助手をさせていただくことになりました。

大学では一貫して流体力学、特に化学反応を伴う乱流拡散の研究に専念してきましたが(株)日立製作所在籍中には各種情報通信機器の冷却やその内部の流れ計測・解析などの研究開発を行ってまいりました。現在は、出身講座である統計シミュレーション講座(酒井康彦教授)に席をお借りし、再び乱流拡散の研究に取り組んでおります。今後は、企業での研究開発経験を生かして、研究・教育活動に励んでまいりたいと考えております。

東山会員の皆様方には、今後ともお世話になることと存じます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



新任挨拶

マイクロシステム工学専攻
マイクロ材料システム講座
奥村 大

平成15年4月1日付けでマイクロシステム工学専攻マイクロ材料システム講座(大野信忠教授)の助手に着任いたしました。学部時代から博士課程後期課程修了まで一貫して大野先生のご指導を仰ぎ、今春より大野研究室の助手に着任いたしました。

大学院では、セル構造体の分岐座屈不安定挙動の解析に取り組んでまいりました。ハニカムや発泡体に代表されるセル構造体は、圧縮負荷を加えると微視構造に座屈が生じ巨視的に複雑な変形挙動を示します。このようなマイクロとマクロの連成した不安定挙動を明らかにするため、マルチスケール理論の構築と、それに基づくコンピュータシミュレーションを行ってまいりました。

今後は、これまでの経験を生かし、積極的に多くのことを学びつつ、微力ながらも日本の科学技術の発展に貢献できればと考えております。

最後になりますが、東山会の皆様、本学の先生方にはこれからもお世話になることが多いと思えます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



学際分野を攻める！

マイクロシステム工学専攻
生体医用マイクロ工学講座
加藤 大香士

学部4年より9年間、生体医用マイクロ工学講座、生田幸士教授の厳しくも暖かなご指導を賜り、本年度4月よりマイクロシステム工学専攻の助手を務めております。医用工学という学際分野で次世代手術支援機器へのニーズを深く探り、コンセプトの提案から実用設計まで行う、モノづくり主体の研究を行っています。最先端分野をにらみつつ、「自分らしい、自分しかできないこと」を模索しております。どうぞ宜しくお願いいたします。



新任挨拶

機械エネルギー工学講座
森 英男

私は平成12年3月に本学の電子機械工学専攻の博士課程後期課程を修了した後、新美教授（当時助教授）の下で特別研究員として研究活動に従事し、平成15年4月より機械情報システム工学専攻の助手に就任致しました。特別研究員の任期中には、1年間ドイツ航空宇宙センターの客員研究員として研究活動を行う機会を頂き、海外の現場に近いところで研究活動に携わる貴重な経験を得ることができました。この間、大学の研究室で学んだのと異なる研究手法や考え方、流儀に触れることができたのは、自分にとって非常に有益な経験となりました。

研究テーマとしては、主に希薄気体流の計測に携わっております。実験が主体の研究であり、しかも超高真空の条件下で行う困難な実験が多いため、結果が出ず失敗続きで悩むこともよくありますが、その分成果が得られたときの喜びは格別です。D1のときに新たな研究テーマを立ち上げたもののなかなか結果が出ず、1年半以上もの間ずっと不安な日々を送っていましたところ、D2の年明け直後になって初めて実験に成功した時の喜びは今でも忘れられません。

今年度からは教職員という立場となり、研究活動のほかに学生の教育などの仕事も入ってきますが、自分自身研究者として精進しつつ、研究の楽しさを学生に伝えられるような教育者となることも目指していきます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

各種報告

東山会平成14年度庶務報告

- (1) 平成14年5月10日
理事会（名古屋大学内グリーンサロン東山、25名）
- (2) 平成14年10月4日
理事会（名古屋大学内グリーンサロン東山、24名）
- (3) 平成13年11月8日
東山会会報発行
- (4) 平成13年11月15日
東山会関西支部総会・懇親会
- (5) 平成14年11月30日
平成14年度名古屋大学工学部・工学研究科同窓会名簿（60周年記念号）発行
- (6) 平成14年1月24日
理事会（名古屋大学工学部2号館 機械系会議室、20名）
- (7) 平成14年3月25日
東山賞授与（3名）
東山会新入会員歓迎会（名古屋大学内グリーンヒルクラブ、70名）
- (8) その他
学内理事連絡会
（名古屋大学工学部機械系会議室）
第1回 平成14年5月1日
第2回 平成14年7月26日
第3回 平成14年9月10日
第4回 平成14年10月1日
第5回 平成14年1月20日
名古屋大学工学部同窓会評議員
平成14年6月12日

訃報

機械工学教室の旧教官（内燃機関及びガスタービン講座）、泉 亮太郎 名誉教授が8月26日に逝去されました。ご葬儀には、東山会より、弔電並びに生花1対を供奉させていただきました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

工学部同窓会名簿購入のお願い

工学部全学科の卒業生および工学研究科全専攻の修了生の最新データ約35,000件が掲載された工学部同窓会名簿が平成14年12月に4年ぶりに改訂発行されました。今回から従来の冊子版に加えてCD-ROM版の名簿も制作されます。CD版はPDF閲覧形式でWindowsおよびMacで利用可能です。また、CD版のみの特典として検索機能、各学科同窓会の紹介記事などがあります。

東山会では名簿購入代金の一部を会報発行などの基本的な活動費に充てております。今回の価格設定に関しても、企業広告の減少や制作単価の上昇等がありましたが値上げは致しませんでした。この決断は、財務状況悪化のリスクを負ってでも、少しでもお求めやすい価格でより多くの皆様にご購入いただけるようにとの判断によります。このような事情をご理解いただき、何卒、最新の名簿をご購入いただくことで東山会の活動をご支援下さいますようお願い申し上げます。なお購入を希望される方は事務局にお知らせください。入金後、直ちに郵送させていただきます。

CD版 3000円 , 冊子版 4500円

「東山会基金」へのご協力をお願い

東山会では、平成8年10月に「東山会基金」を創設するとともに、本会事業の一つとして名古屋大学大学院工学研究科機械系専攻の優秀な学生に対する「東山賞」表彰事業をおこなっております。

東山会ではさらにこの「東山会基金」を一層拡大・充実し、「東山賞」表彰事業の他に、東山会の事業の拡充、例えば若手研究者の研究育成等の新規事業の実施を計画しております。

東山会では、総会事業、会報・名簿発行事業などに加え、この表彰・助成事業は、将来の同窓会活動の重要な事業の一つと考えておりますので、「東山会基金」充実のために会員各位のご理解とご協力をお願い申し上げます。この趣旨にご賛同の会員は、金額の多寡は問いませんので、下記の銀行口座までご寄付の払い込みを賜れば幸いです。

記

銀行・支店名 UFJ銀行覚王山支店(店番 264)

口座種類・番号 普通預金口座 1394476

名義人 東山会基金 東山会会長 鈴木隆充

東山会ホームページについて

昨年、東山会ホームページを開設し、東山会からのお知らせ、年間行事予定、行事写真集などを設置しております。このホームページでは同窓会の活動内容を会員の皆様に情報提供するだけでなく、会員同士の親睦とコミュニケーションの場を広げ、更に同窓会の新しい活動を見出していきたくて考えております。

今後もホームページを充実させていきたくて考えておりますので、皆様の活発なご意見をいただきますようよろしくお願い致します。

